



TITLE:

おわりに

AUTHOR(S):

CITATION:

おわりに. 京都大学高等教育叢書 2001, 11: 33-35

ISSUE DATE:

2001-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53655>

RIGHT:

お わ り に

田 中 毎 実

京都大学高等教育教授システム開発センターはこれまで、具体的な授業場面の実践的検討を通して、授業研究や教員研修（ファカルティ・ディベロップメント／FD）を実施してきた。私たちが実施してきた多くのプロジェクトのうちでも、本書で報告した授業参観プロジェクトは、大学の教員養成の在り方を検討する点で、際だって大切な位置を占めている。

本報告書で詳しく記されているように、授業参観プロジェクトは、藤岡完治教授のセンターへの赴任をきっかけとして、平成12年度以来、藤岡教授と石村雅雄助教授との緊密な連携によって、実施されてきた。個別大学の枠内でこのように多くの授業公開を組織した例はない。おそらく全国でも類例のない企画である。藤岡教授らの懸命な努力に敬意を表するとともに、これに応じていただいたこのように多数の教官の方々の熱心なご協力に、深い感謝の意を表明したい。

以下では、この特異なプロジェクトが京都大学高等教育教授システム開発センターのプロジェクトのうちで占める位置について一般的に説明し、このプロジェクトの今後について若干の議論をしておきたい。

1 公開実験授業とFD

センターのFDに関する基本的なスタンスを定めてきたのは、公開実験授業プロジェクト⁽¹⁾である。公開実験授業とは、80人前後という中規模クラスで受講生と教師との間に双方向性を成立させようとする授業実践の試みであり、実証的研究と現象学的研究とを統合しようとする授業研究の特異な企てであり、授業者と参観者との間での「相互」研修の営為である。

公開実験授業を研修という視点から見ると、私たちがここで一貫して強調してきたのは、大学教員の研修が「相互」研修であるべきだという考え方である。京都大学高等教育教授システム開発センターのスタッフは、外からは、とすれば大学教育の専門家集団であると見なされがちである。しかし、私たちスタッフと他の教員は、大学教育の実践者であるという点ではなんら違いはない。違いがあるとすれば、私たちの場合には、実践にあたっての「教育」に関する前理解を理解に深める機会に、比較的恵まれているという点にあるかもしれない。しかしこの違いも相対的なものであるにすぎず、前理解を不断に理解に組み込もうと試みなければならないと言う点では、スタッフも他の人々もなんらかわりはないのである。

専門家と素人という「啓蒙的」な構図は、ファカルティ・ディベロップメントを含む大学教員の能力向上活動には、あまりうまくは馴染まない。大学教員のこの種の活動には、自律的活動者どうしの協働こそが相応しいのである。私たちは、模範的な授業を提示したり、一般教員の通常授業に入り込んでこれを指導したりする「啓蒙的」なスタンスをとることに、激しく抵抗してきた。私たち自身の授業の拙さを手がかりにして、私たち以外の仲間たちとお互いに学びあうこと。これが公開実験授業プロジェクトにおける私たちの基本的なスタンスであった。専門家と見なされがちなセンタースタッフの授業を（「モデル」ではなく）「たたき台」とする公開実験授業の検討会こそが、さしあたっては、「相互」研修の場として格好であるように思われたのである。

2 公開実験授業プロジェクト第Ⅰ期から第Ⅱ期へ

公開実験授業プロジェクトは、私が一人で授業を担った3年間（第Ⅰ期）とリレー式授業によって授業者集団と参観者集団とをできるだけ一致させようとしたここ2年間（第Ⅱ期）に分かれる。第Ⅰ期のさまざまな試行によって、授業後開催される授業検討会の在り方についても、さまざまな貴重な知見が蓄積されてきた。たとえば、公開授業の参観者としては適切な人と不適切な人があり、無責任な発言を排除するためには、少なくとも現に高等教育の場実践的なフィールドをもつ人の参加が望まれる。この条件を満たささえすれば、大学院大学であれ短大であ

れ工業高等専門学校であれ、理系であれ文系であれ、あまり大きな本質的な違いはない。受講生たちを能動化し、彼らの学びを成立させる手だてを求めるという点で、私たちの間には（高等教育において帰属する場所の違いにかかわらず）利害の基本的な一致があり、それによって相互の深い討論が可能であるからである。こうして私たちは、第Ⅰ期プロジェクトによって、検討会の理念、参加者、形式（司会者、テーマ設定、進行など）について、およその輪郭を獲得することができた。

第Ⅱ期には、相互研修の形式は、より一層確立されてきた。まず何よりも、リレー式の授業によって、授業者と参観者が大きく一致し、検討会そのものが密度の高い集団的・相互的な反省活動となった。そればかりではなく、検討会を構成するという技術的な面でも一定の前進があった。たとえば、第Ⅰ期の検討会は、授業者の自評で始まるのが常であったが、そうすると、ともすれば授業者の「懺悔」で始まり、他の参加者の儀式的慰撫で終わるというステレオタイプが繰り返されがちである。このステレオタイプな構図を打ち破るために、第Ⅱ期では、授業を客観的に記述するフィールドワーカーと主観的に記述するフィールドワーカーを設定し、まず彼らが発言することから検討会を始めることにした。その結果、第Ⅰ期のステレオタイプはあっさりと消失し、冷静な振り返りから始めることができるようになった。しかしリレー式授業には、相互研修の面から見て、大きな問題がある。なによりもまず、授業者／参観者集団からなる常連の討議密度が増加するにつれて、検討会のマンネリ化と自閉化が進んでくる。常連ではなく新鮮な一時的参加者のもたらす緊張こそが望まれるが、マンネリの打破をすべての「一見さん」に望むことは、あまりにも酷である。リレー式公開授業においては、検討会の新たなマンネリ化を克服する手だてが、切実に求められるのである。

以上のような、公開実験授業は、KKJ（京都大学慶應義塾大学連携ゼミ）プロジェクト⁽²⁾、TIDE（京都大学UCLA連携授業）プロジェクト、SCS利用教員養成プロジェクト、そしてこの報告書で報告する授業参観プロジェクトなど、センターのさまざまなプロジェクトの一環である。いいかえれば、公開実験授業の授業実践、授業研究、相互研修という三つの側面は、これらすべてのプロジェクトと相補的關係のもとにあるといえるのである。

3 ボトムアップのFDとトップダウンのFD

この公開実験授業プロジェクトを教員研修という面に焦点づけてみると、そのもっとも大きな否定的な特徴は、非効率性という点にある。ここでの相互研修は、じっくりと深くなされるが、ただ参加を呼びかけじっと待ち受けている限り、参加者はそんなに増えることはない。この欠陥を越える方途は、さしあたって3つ考えられる。1つには、授業参観プロジェクトのように、こちらから出向いていくこと、2つには、公開実験授業のようなボトムアップ型FDと、関係者を一網打尽にするようなトップダウン型FDとを併用すること、3つには、遠隔システムを用いることである。

センターの主催するFDには、毎週実施する公開実験授業、ほぼ毎月実施する公開研究会、毎年実施する大学教育改革フォーラムの3つがある。あとの2つは、トップダウン型のFDである。公開研究会は、テーマによって、参加する人数も顔ぶれも大きく変わる。大学教育改革フォーラムは、その参加者を見る限り全国規模の集会であり、毎年150名程度の参加者を得ている。さらに、私たちのセンターが構想や実施に深く関わっている「京都大学の教育を考える教員集会」もすでに4回実施されており、確実な成果を挙げている。これらはすべてトップダウンのFDであり、公開実験授業でのボトムアップのFDと相補的なのである。

遠隔システムを用いるFDとしては、SCS利用教員養成プロジェクトがあるが、これは、文部省メディア教育開発センターとの共催事業であり、公開実験授業を遠隔で実施しようとする試みである。平成12年度では、まだ試行をはじめて2年目の段階ではあるが、SCSによって直接に体験できない授業の検討をすることには、かなりの制約がある。このようなことが、明らかになりつつある。しかし、センターの相互研修プロジェクトとしてもっとも期待のかかるのは、わけでも授業参観プロジェクトである。

4 公開実験授業プロジェクトと授業参観プロジェクト

藤岡教授は、本センターへの赴任早々に、まず授業参観の依頼を京都大学の全教員に発送した。藤岡教授との雑

談で私は、「反応は一人くらいかな」とひどく悲観的なことを口に出した覚えがある。この予想は大きく覆された。なんと60名以上から受諾の返答をえることになったのである。この予測の食い違いがなぜ生じたのか、つまり、予想はなぜ裏切られたのか。このことを検討することは、ここでの紙幅からしてとてもできないが、これは、おそらく今後のFD事業を考えるにあたっては、きわめて大切な議論であるだろう。

私たちは、公開実験授業への学内からの参加者があまりにも少ないことから、こちらから出かけて研修のネットワークを築こうとした。これが授業参観プロジェクトである。こうして、同じ相互研修という意図をもちながら、公開実験授業プロジェクトと授業参観プロジェクトには、参加を待ち受けるのか、それともこちらから出向くのかの、大きな違いがある。この意味で両者は相補的であるが、これとは別の補完関係もある。センターの公開実験授業が継続的に続けられておりいつでも参加できるという事実が承知されていることこそが、一般の授業者の授業開放への敷居をかなり低める力をもっているとも考えられる。この意味でも、両者は相補的なのである。

藤岡教授らは、60名以上もの教官の授業を参観し、受講生にその授業の感想を書かせ、それらを受けて、授業終了後できるだけ早い時期に、その授業から受けた主観的印象を授業者に書き送っている。初年度の終わりには、参観を受けた教員によって反省会が実施され、関連するメーリングリストが作られつつある。このプロジェクトはまだ出発したばかりであるが、生産的な未来を予測させるものである。

5 授業参観プロジェクトの未来

授業参観プロジェクトは、相互研修としてのピアレビューが可能になるためのきっかけとして構想されている。けっして、センターの「専門家」が、「素人」である授業者の授業を評価したり指導したりするために出向いているわけではない。藤岡教授の言葉を用いるなら、ここでのセンター教員は、授業者が自分自身の授業の有り様を写しだす反省的な「鏡」である。

藤岡教授らの報告は、京都大学で実施されている授業が思いのほか多様であると同時に、学部や学科など一定の範囲では、(授業者たちの主観的な思いなしとは異なって)その形式においてかなり類似していることを示している。これらの点で、センタースタッフの先入見は、大きく覆された。このようにして、授業参観プロジェクトにおいては、参観する側を含めてさまざまなレベルで〈相互の学び〉が成立しているのである。

しかし、大学の教員は本来であるなら、自発的かつ自然発生的に集まり、相互研修を実施するべきである。授業参観プロジェクトは、この相互研修のための呼び水として存在しているのであり、それ自体として完結したプロジェクトであるわけではない。平成13年度以降にも、初年度と同じような活動がただ量的に拡大されて繰り返されるとすれば、不毛であるとしかしいようはない。授業参観の実施を起点とした相互研修のネットワークづくりが、これからどの程度、進捗するのか。ここに、このプロジェクトの成否がかかっているのである。

〈註〉

- (1) 公開実験授業については、京都大学高等教育教授システム開発センター編『開かれた大学授業をめざしてー京都大学公開実験授業の一年間』玉川大学出版部1997、同編『大学授業のフィールドワークー京都大学公開実験授業』玉川大学出版部2001、田中「大学授業のフィールドワークから大学教育学へー公開実験授業プロジェクト3年間の中間的総括ー」『京都大学高等教育研究 第5号』1999、などを参照。
- (2) K K Jプロジェクトについては、京都大学高等教育教授システム開発センター編『京都大学高等教育研究』第5号2000、同編『平成11年度KKJーKyoto Keio Joint Seminarーで何が起こったかー授業・合宿・インターネットを通した学びー』京都大学高等教育叢書7号の関連論文を参照。